6．肺癌術後ARDSの1例

椎名　良直，相良　恒俊，安蒜　聡
滝口　伸浩　（市原市民病院・外科）

肺癌の右上中葉切除術後第2病日より急速にARDSを発症し，17病日にDIC，MOFを合併し死亡した症例を経験した。発症の原因は不明であり，抗癌剤の関与や，術前から始まっていた肺の繊維化が種々の侵襲で急性増悪を示した可能性も考えられた。臨床経過に若干の文献的考察を加えて報告した。

7．閉塞性黄疸例の術後高ビリルビン血症発生例の検討

郷地　英二，宮崎　勝，伊藤　博
海保　隆，安蒜　聡，安藤　克彦
大多　和哲，尾形　章，安田　典夫
林　伸一，高西喜重郎，永井　基樹
外川　明，大塚　将之，中島　伸之
（千大・一外）

閉塞性黄疸を伴う悪性腫瘍に対する肝切除における問題点につき検討した。対象は肝切除134例で，閉黄例，および2区域以上（とくに拡大右葉・右3区域切除）の肝切除例に術後肝不全，高ビリルビン血症の発生率が高く，術前の減黄率，術後早期のT-Bil値がある程度予後を規定した。閉黄例の肝切除に際し，正確な肝予備能の把握・術中肝血流の保持と，癌の進展範囲と機能とを照らし合わせた上での残存肝重量の温存が重用であると思われた。

8．下肢急性動脈症例の検討 MNMS（Myonephropathic metabolic syndrome）症例を中心として—

大貫　洋子，沖本　光典，野口　照義
（県救急医療センター・外科）

この16カ月の間に，23例の下肢急性動脈症例を経験し，再灌流後にMNMSにより死亡したのは5例，MNMS発症の恐れあり，下肢切断施行が5例で死亡はなかった。

MNMS，下肢切断群では虚血範囲が広範で，虚血時間も長い症例が多く，時間と範囲で危険性の予測ができる可能性があった。またASOの合併は動脈閉塞に際し，有利に働く場合も認められた。

9．紋扼性イレウスからDICをきたした肝硬変の1例

浦島　哲郎，阿部　恭久，宮崎　信一
三浦　文彦，野村　庸一
（公立長生・外科）

症例は，62歳男性。DIC，急性腹症の診断で開腹した。手術所見は，腸管壊死を伴わないS状結腸軸捻転症であり整復術を施行した。本例は肝硬変を合併していた。術後，ARDS，肝不全，DIC進行しMOF状態となり第7病日死亡した。また紋扼性イレウスからDICをきたしたが救命しえた1例を経験した。肝硬変合併の有無が両者の予後を分けた一要因と思われた。

10．DIC，脳出血を併発し，死の転機をとった黄色ブドウ球菌髄膜炎の1例

野崎　益司，永谷　京平，光島　徹
（亀田総合病院・消火器内科）
山川　晴重　（同・内科）
井合　茂夫　（同・脳外科）

脂肪肝による肝機能障害以外特記すべき既往のない21歳の青年が，髄膜炎を含む劇症型の黄色ブドウ球菌感染症を発症し，DIC，脳出血を併発して第8病日に死亡した症例を経験した。咽頭粘膜，血液および髄液に黄ブ菌が検出され，病理所見では大脳，心筋等に微小膿瘍と小動脈の細菌塞栓が認められた。診断基準は満たさないが，Toxic-shock syndromeとの関連が注目された。

11．HELLP症候群の2症例

田中　成浩，篠崎　淑子，大山　育子
小澤みどり，石井　健，福家　伸夫
（帝京大市原・中央治療センター）
森田　茂穂　（同・麻酔科）

当センターにおいて2例のHELLP症候群を経験した。症例1：32歳女性。妊娠32週。妊娠後期より中毒症があり，病状悪化のため入院。上記診断のもとに帝切施行し，加療する。術後第2病日迄血小板値5万以下であったが第3病日より軽快した。症例2：22歳女性。分娩後，網膜剥離，子癇発作を呈し，生化学検査の結果HELLP症候群の診断にて当院転棟入院となる。これも症例1と同様第3病日より血小板値検査値の改善を認めた。

Martin等は，治療法の1つである血漿交換療法の導入について分娩後72時間の状態をもって決定するとしている。今回の2例はそれに基づいて治療したものであり，双方とも血漿交換を施行せずに軽快した。今後